宇野浩二未発表書簡六十八通

――渋川驍宛六十七通、竹村書房宛書簡一通――

増田周子

宇野浩二の渋川驍宛書簡六十三通、電報四通、竹村書房の竹村坦宛書簡一通を紹介する。未発表書簡六十八通は、昭和十三年二月五日から、昭和三十三年十月二十日までの二十年間に及ぶものである。

これら書簡から、夏目漱石の行った「木曜会」を意識した、宇野浩二主催の「日曜会」の出来事がよくわかり、大変興味深い内容となっている。ところでこの「日曜会」とはどんなものであろうか。『日本近代文学大事典第四巻』（昭和52年11月18日、講談社）の「事項」編には、「日曜会」の項目は採用されていない。今回この書簡を紹介することで、少しでも宇野浩二が努力し、中心的な役割を果たした「日曜会」が、そして若手作家や宇野浩二の文学への強い思いが広く知られればと思う。

宇野浩二は昭和二年の大患の後、昭和八年一月、「枯木のある風景」で堂々の文壇復帰を果たした。それまでの作風を一変し、後期の宇野浩二文学を方向づける重要な転機となるものであった。宇野浩二の病気を一番心配していた芥川が、すでに鬼籍の人となっていたが、嘉村礒多、川崎長太郎、田畑修一郎らによって、二月二十日「最近の仕事を祝う会」が上野の三橋亭で開催された。この会が機縁で宇野浩二を囲む会がもたれるようになり、そのうち「日曜会」と命名され、宇野浩二が死ぬ昭和三十六年まで、二十八年間続いたものである。何の制限もなく、文学論を交わす自由な談話会で、いろんな文学者や評論家、出版関係者らが次々に参加した。宇野浩二は、昭和十三年二月五日（書簡番号1）で「日曜会はやがて、（この次から）僕中心ではなく、ただの日曜会として、この間のやうな、それ以上の、文学談話会にした方がいい、といふ気になつてをりま

す。」と述べ、「日曜会もつと集まりが少なくてもみんなが話をできるやうな会にならないでせうか。」（書簡番号18）「日曜会とか、僕の会とか、いふのでなく、毎月十五日と二十日の間に、有志の会といふやうな会があつたら、と願つてをります」（書簡番号18）とも書いている。宇野浩二はあくまで、集まった人々が自由に談話するという会のあり方にこだわったようだ。

宇野浩二は「どうも日曜会が遠のくと寂しい気がいたします。」（書簡番号38）と記しているように、「日曜会」には殆ど欠席することはなかったが、突然の雷に「出かけやうとしたら雷が鳴りはじめ、蚊帳の中に入り、蒲団をかぶり、九時半頃まで耳をおさえて、大汗をかいた」（書簡番号27）ということもあった。宇野浩二の雷嫌いは、ＡＢＣ「文壇風聞記　宇野浩二と蛇」（「文章倶楽部」大正10年1月、第6年10号）などのゴシップ記事で、「宇野浩二氏の嫌ひなもの、それはヒステリイの女と、雷だ。雷が鳴り出すと宇野氏は真蒼になつて葺の葉のやうにふるへ出す。撃たれて死ぬのは怖かあないが、あのピカピカゴロゴロが堪らないんだよと、青い息をつく。」と早くから伝えていた。

さて、渋川驍によると「日曜会」への渋川驍の参加は、昭和十五年一月三十日の「日曜会」に、高見順をとおして参加するように誘われた（「菊を入れる」『宇野浩二回想』昭和38年9月21日、中央公論社）というのであるが、これら今回紹介する書簡によると、宇野が「日曜会」のあり方などに関する意見を、渋川驍に述べている個所が昭和十三年二月五日（書簡番号1）から、随所にみられ、十五年以前から渋川驍は「日曜会」に参加している、と思われる。渋川驍の思い違いであろう。

日曜会以外のことでも注目すべきことがある。「日暦」の同人であった渋川驍が、昭和九年四月から六月にかけて「日暦」に連載した「龍源寺」は、昭和十三年六月に竹村書房から単行本となって出版された。最初宇野浩二が石川淳に頼んで版画荘から出版するように依頼したが実現せず（書簡番号4）、その後、竹村書房に出版を勧めて（書簡番号3）、広津和郎に序文を、宇野浩二自身が扉題字を書いた経緯（書簡番号5）もうかがえるなど、なかなか興味深い。また、昭和十三年上半期の芥川賞候補となったのであるが、宇野浩二はその選考委員として、「龍源寺」について次のように記している。

渋川驍の『龍源寺』は、これも六七年前に或る雑誌に出たもので、その当時読んだときは可なり感心したのであるが、本になつたのを読んで、何故か「律義者の子沢山」といふ諺が私の頭に浮かんだ（中略）渋川の小説にはそつがないと云ふ事が云へるであらう。恐らく、かういふそつのない小説を書く渋川は見

たところ律義者のやうな人かも知れない。しかし、心の中には律義の正反対のものを持ってるかも知れない。私は、渋川君が、律義の正反対のものを、若しあるなら、表面に現し、もっとそつのある小説を書くやうになることを待望するものである。

宇野浩二の、渋川驍への次作への期待と思いやりが感じられる。

昭和十七年頃からは、渋川も「日曜会」の雑用を少しずつしていたらしく、日時や場所の設定や一泊旅行の計画などの相談の記述もある。（書簡番号5）

昭和十八年二月十日には「日曜会」十周年記念会が築地の芳蘭亭で開催され、倉橋彌一、徳永直、田畑修一郎、間宮茂輔、矢崎弾、石光葆、中野重治、高鳥正、新田潤、野口冨士男、渋川驍、田辺茂一が出席した。宇野浩二を含めて十三人であった。（『宇野浩二回想』の口絵写真参考）渋川驍「菊を入れる」（前出）によると、この席上で記念文集を作ることが提案され、その委員には、田畑修一郎、中野重治、倉橋彌一の三人が選ばれたとある。宇野浩二は、この三人に協力して出版社を探し、（書簡番号40）また、田畑修一郎が親戚の不幸その他で、旅行をするので渋川驍に手伝いを依頼する手紙（書簡番号41）を宇野浩二が出していることもわかる。しかし、戦時色が濃くなり、結局は立ち消えとなったようである。

昭和二十年五月に宇野浩二が松本に疎開してからも何とかして「日曜会」に出席したい旨の書簡（書簡番号45）があったりで、宇野浩二がどんなにこの会を大切に思っていたか、文学談を交わすことを無上の喜びとしていたことなどが、うかがえる。

昭和二十二年五月十七日（書簡番号47）の電文は、電文の翌日「日曜会」に出席のため、宇野浩二が渋川驍と落ち合う場所を「天狗」に変更したことを伝えるものである。戦後初めての「日曜会」は、昭和二十二年五月十八日、新橋際の旧「天国」の二階、銀座倶楽部であった。その前日の電文である。渋川驍は、「菊を入れる」（前出）に、次の如くに記している。

昭和二十二年、五月十八日、私は神田駅近くの「天狗」という小料理屋に宇野さんを迎えにいった。そこで、宇野さんは、水上勉君の筆記で、文潮社で出していた機関誌の原稿らしい口述をしていた。

昭和二十二年五月十八日の「日曜会」については、「十七人位案内状を出した」のに出席者は、石光葆、川崎長太郎、渋川驍、上林暁と宇野浩二の五人だったようだ。渋川驍は、「弐作家の死について、宇野さんの粘り」（「全線」昭和37年1月）で「こんなに少人数になったことは、日曜会としては、初めてのことだった。」と語り、石光葆は「宇野浩二さんを偲ぶ」（「日暦」昭和37年5月15日、第52号）に当時の自分の日記を引用して、「私は出席者の少ないことを

気にしていたが、宇野さんはまるで無頓着で、ぐちらしい一言も洩らさず恬然と話しつづけられたのには敬服した。」と記している。また、上林暁も「宇野さんを囲む会」（「新文芸」昭和22年8月1日、第2巻4号）に次のように書いている。

倉橋彌一君は、その後不慮の死を遂げ、終戦後初めての「日曜会」で再びその顔を見ることが出来なかったのは一抹の寂しさだった。「日曜会」と言へば、幹事会の倉橋君の姿が直ぐ浮かぶのである。

ちなみに、倉橋彌一は、昭和二十年六月六日、下十条駅で誤ってフォームから転落して轢死してしまった。

この書簡（書簡番号23・41）のなかに、「大正文学研究会」の記述がみられる。高見潤の「思い出二つ」（『宇野浩二回想』）によると、「倉橋彌一の発案で大正文学研究会というのを私たちはやっていた」とあり、「会の名は大げさだが、大正期の先輩作家から文学の話を聞こうという会である。」という。『日本近代文学大事典第四巻』（前出）の「大正文学研究会」の項目で渋川驍が、「高見潤の主唱によったもので」と記述しているのは、間違いであろう。高見潤は「この倉橋彌一が私を、宇野さんを囲む会に連れて行ってくれたのだ。」ともいう。「大正文学研究会」は、東京駅八重洲口の八重洲園という喫茶店で開かれ、宇野浩二も招かれた。

渋川驍は、このように多くの人々に囲まれ、親しまれた宇野浩二を敬愛し、宇野浩二からの書簡を大事に保管していたのであった。

宇野浩二の著作権継承者の宇野和夫様、ならびに渋川驍の御遺族の山崎眞狩様の御好意により、ここに紹介できますことを心より感謝し、お礼を申し上げる。

一　昭和十三年二月五日（消印　下谷／13・2・5／前8―12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

お手紙と雑誌二冊ありがたう存じます。三月になりましてからか、もしかすると、日曜会が今月もあるかもしれませんから、どちらにしても、『龍源寺』を拝読しましてから、愚感述べさしていただきます。日曜会は、やがて、（この次ぎから）僕中心でなく、ただの日曜会として、この間のやうな、それ以上の、文学談論会にした方がいい、といふ気になってをります。拝眉の折　草々。

二　昭和十三年三月三日（消印不明）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（封書）便箋二枚　四銭

拝復

実はまだ仕事をつづけて居ります。多分十日か十一日頃に終るかと思ひます。

僕はこの七八年風を引いたことがありません。いつか日曜が都合がいいやうに申しましたが、仕事の幾らか暇な日は何曜でもかまはないのです。唯、あの会は、勤めてゐる方があったり、いろいろの都合で、日曜にすることに極められたのです。

それで誠に勝手でございますが、今度は二十日に会があるさうですから、その日にお目にかかりまして、御来駕（僕の家へ）下さる日をきめていただきたいと存じます。

二十日と申しましたのは、小説が終りましたら、殆ど九分どほり出来あがって居ります、『ゴオゴリ』（評伝）を脱稿したいと思って居りますからです。いつも勝手申しまして恐縮です。

三月三日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

三　昭和十三年四月十七日（消谷　下谷／13・4・17／后0—4）／東京市下谷区上野桜木町十七より／四谷区坂町七八／竹村坦宛（官製ハガキ）二銭

葉山嘉樹君の本ありがたう存じます。図書目録で見ますと、ずゐ分いい本を出して居られるのに、お世辞でなく感心いたしました。しかし、あの中に渋川驍君の『龍源寺』が入ってゐないのを寂しく思ひます。もし渋川君の本をお出しなさいます時は、僕序文を書いてもよろしく思ひます。

四　昭和十三年四月二十五日（消印　不明）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（封書）便箋二枚　四銭

拝復

御出版のこと、僕も自分の事のやうに嬉しく思ひます。実はその前に、石川淳君に版画荘から出すようにと頼んだのですが、あの版画荘の叢業の売行の悪いことと、主人がよくないといふ事とで、うまく行きませんでした。

それで、竹村君に手紙のついでに、（改めて云ふよりいいと思ひまして、）あなたの『龍源寺』の出版を進めたのでした。尚、僕は、去年、小説を、いろいろの事情で、なまけましたので、今年は、去年からの約束の小説を、書くつもりで、先づ「改造」のを書いたのですが、一週間テツヤといふやうな無理をしましたので、無理がたたって失敗しました、が、さいはひ、珍しく、もう一つ書きたい物がありますので、これも去年からの約束の「文藝春秋」に、それを

書くつもりで、もうそれにかかつて居ります。それが六月号ですから、又々多忙ですが、さいはひ二十七日の午後六時に新宿まで用事で出かけますから、さうしましたら、あなたの方も近くて御便利かと思ひますので、二十七日の午後五時頃、武蔵野駅の横の天城画廊でお待ちいたします。

尤も僕は出版に関する知識はありませんから、その御忠告など出来ませんが、序文は承知いたしましたから、その事でお目にかかりたいと思ひます。念のために、天城画廊の広告を同封しておきます。

四月二十五日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

五　昭和十三年四月二十八日（消印　下谷桜木町／13・4・28／后4—8）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（封書）便箋一枚　速達十二銭

突然で、違約の形になり、恐縮ですが、今日、中央公論の記者が来まして、いつかお約束しました「文芸評論」（随筆的評論）を五日までにお願ひします、と云ひました。これは三日「文芸評論」を約束してありましたのに、「改造」の小説が延びたので、延ばしたのを忘れてゐたのです。—それで、龍源寺の序文を広津にたのんで下さいませんか。勿論広津には僕が急に断つたと云はずにたのんで下さいませんか。

その代り、扉の字を僕が書きますから。

どうもこれから評論と小説では他の仕事が出来ませんので。

四月二十八日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

六　昭和十三年四月二十九日（消印　下谷／13・4・29／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

気がいそいでゐましたので、走り書きのソクタツさし上げましたが、どうしても時間のヤリクリがつかなくなつたのです。それに、間宮君の「あらがね」に僕が序文をかいてゐますから、今度は広津の序文の方がよく、その他いろいろ都合のいいことがあるやうに思はれます。「龍源寺」のまえ[1]の両側の二行アキは間延[2]がするかと思ひます。一行アキの方がいいかと思ひます。それから、ケンエツ云々とエロ云々と申しましたのは、「龍源寺」の前篇の十一頁の前半のことで、（しかし、あの辺はいいと思ひます、）やはりあなたの改訂（削除）された後篇の二十五頁のあの辺はお直しになつた方がいいと思ひます。広津の義弟—松澤太平君の電話番号（新日本文化の

会―ギンザ一四五五）です。少しでもヒマがありましたら、お送り下さいました、□□□□拝読したいと思ひますのでしばらくお貸し下さいませんか。

ベツビンデ「リュウゲンジ」ダイソクタツデオオクリシマス

七　昭和十三年五月二日（消印　下谷／13・5・2／前8―12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

葉書で失礼いたします。広津は如何なる場合でも殆ど返事を書かない人ですから、まづ松澤君に電話をおかけになるのが近道かと思ひます。松澤君は大抵二時頃に出社してゐる筈です。池田君からあの晩の詫の手紙がありました後に、あの芝居は築地のやうな小さい劇場の方がぴったりして、新宿第一劇場は失敗でありました、と云って来ました。

。十二日以後でしたら、序文お書きいたします。

五月一日夕

八　昭和十三年五月四日（消印　下谷／13・5・4／后8―12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一丁目九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

葉書で失礼いたします。◎広津はこの二、三年前から油絵をかきたがって居ります。お察しのとほり、今の広津は油絵をかく時だけが幾らか気のノンビリする時かと思ひます。

◎題字承知いたしました。折返し、何といふ字をどういふ竝べ方で、どのくらゐの大きさで、といふ事を、四六版の大きさの見本で御教示下さいませんか。◎今度の日曜会は今月二十日頃かと思ひます。その頃ゆっくりお目にかかりたいと思ひます。◎万が一、広津の序文が出来ず、十四日以後でよろしかったら、僕が序文を書いてもよろしうございますが、その時は題字は広津か他の人にして下さいませんか。

九　昭和十三年五月七日（消印　不明）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（封書）便箋一枚　四銭

これでお許し下さい。

間宮君からの便り（五日）に、一昨夜（三日夜）広津氏白河の方へ絵をかきに…」とありまして、一週間ぐらゐで帰るとありますから、仰せのとほり十日には帰ってゐるかと思ひます。

「文藝春秋」の小説―やっと今日あたりから目鼻がついたところです。「中央公論」は文芸批評（実は随筆風文芸観」です。今夜あた

りからぼつぼつ徹夜をはじめとするつもりです。

五月七日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

二伸　題とお名前少しまがつて居るやうですが、これもお許し下さい。著はない方がいいと思ひます。

十　昭和十三年五月九日（消印　下谷／13・5・9／前8―12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

広津から便りがありました。白河からです。

八日出です。天気が悪くて三四日絵がかけず、「もう三四日ここで（宿泊）暮さうかと思つてゐる」と書いてあります。で帰りは十一、十二日頃かと思ひます。十三日においでになつたらブナンかと思ひます。

十一　昭和十三年六月十五日（消印　下谷／13・6・15／后0―4）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

此間は失礼しました。「中央公論」に先月六月号に書く約束の文芸時評（「文藝」に書いたやうなもので大家について語つたもの）を七月号にしてもらつて四五日テツヤつづきで書きましたが、間に合はず、八月号に延ばしてもらつたやうな始末で、まだ当分済みません。「ゴオゴリ」の校正九分どほり済みました。今日（これと一緒に倉橋君にたのみのハガキ出して）日曜会でお目にかかりたいと存じます。申し後れました。御本ありがたう存じます。

十二　昭和十三年七月十六日（消印　下谷／13・7・16／后8―12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

その後は御無沙汰してをります。いつかお借りしました切抜、今度会がありましたら、持参いたします。「龍源寺」もう一回御恵与下さいませんか。

七月十六日

十三　昭和十三年七月十八日（消印　下谷／13・7・18／后4―8）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

「龍源寺」さつそく有難う存じます。

取敢ずお礼申します。

七月十八日

十四　昭和十三年七月十九日（消印　下谷／13・7・19／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

唯今お手紙ハイケンしました。

ゴオゴリ校正　第三校　大阪の本社にやらせましたが、相談の上、後書レイブン九月中頃に出すことにしました。

例に依つて例の如く多忙ですが、お蔭でカゼひとつ引きません。

会は倉橋君にお任せしてあります。（但し今度の日曜は芥川忌ですから日時が変更するでせう。）拝眉をたのしみに。

十五　昭和十三年十一月二十三日（消印　下谷／13・11・23）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

前略　いつもいつも御本ありがたう存じます。おくれながら厚く御礼申し上げます。

日曜会といふやうなものも、僕だけの考へですが、もう出来なくなるのではないかと思ひますが、月に一度ぐらゐ何かお目にかかる会（といふ形でなくても）があつてほしいと望みます。さういふ時でないと、お目にかかる機会がありませんから。例へば広津や谷崎にも一年に教へるほどといふ有様ですから。

十六　昭和十三年十二月十五日（消印　下谷／13・12・15／后0—4）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

拝復、毎年お休のない有様ですが　今月の本テツヤの日多く　今「文藝春秋」の一月号の小説を書いて居ります。勝手ですが、十八日の会の時に、いろいろ事情お話し申し上げます。

十二月十五日

十七　昭和十四年一月四日（消印　下谷／14・1・4／后8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五　山崎様方／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

賀　正

昭和十四年一月吉日

十八　昭和十五年一月十六日（消印　下谷／15・1・16／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）　二銭

拝復—ハガキで失礼いたします。

日曜会もつと集まりが少なくてもみんなが話を出来るやうな会にならないでせうか。もつとも、これは幹事倉橋君にいふべき言葉です

が、内閣が変つたやうに変つたものになりたい、と思ひます。
さて、古田さんにいつでもお目にかかります。
二十日すぎから三月の小説にかかりたいと思ひますが、十九日の午後四時頃にしていただきたいと存じます。もしその日に急用ができましたら、朝のうちにソクタツでお知らせしたいと思ひますので、古田さんの御住所御一報下さいませんか。

十九　昭和十五年十一月二十四日（消印　下谷／15・11・24／后0—4）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

別府のお菓子、それから、今度の御本—といただき物ばかりしてゐながら、お礼も申し上げず失礼してをります。ありがたう存じます。
日曜会とか、僕の会とか、いふのでなく、毎月十五日と二十日の間に、有志の会といふやうな会があつたら、と願つてをります。
十一月二十四日

二十　昭和十六年一月二十七日（消印　下谷／16・1・27／后4—8）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（封書）便箋一枚　四銭

拝復
ずつと前に、倉橋君に、あの会を、僕の会といふことにしないで、つづけることをお願ひし約束いたしました。いつそのこと、大正と昭和の頭字をとつて、大昭会とでもしたら如何ですか。
さて、二月は十七、十八、の両日はどうでせう。それから、倉橋君にお逢ひの折、もう三月号の雑誌の原稿のためにカンヅメ多忙になつて居りますので、いつも失礼いたしますやうに、玄関で三十分ぐらゐ、といふことにおたのみ下さいませんか。
大正文学研究会も十七日から二十日までででしたらお伺ひいたしますから、この方は会の方から、日時と場所を、一週間ほど前にお知らせ下さいませんか。
一月十七日　　宇野　浩二
渋　川　驍　様

二伸　ずゐぶん前のことですが、別府の名物ありがたう存じます。

二十一　昭和十六年九月二十日（消印　下谷／16・9・20／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛　（官製ハガキ）二銭

先夜は失礼いたしました。

倉橋君にもお約束したのですが、芥川君のことは改めて書く時間がどうしてもありませんので、これまでに発表したもので、お間に合はせしていただきたいと、お断りしたのですが、それでもよいと云はれましたので、承知したのですけれど、その芥川君のことを書いた文章を近々に出す本の中に入れてしまひましたのを、昨日気がつきましたので、今度はお許し下さいませんか。

二十二　昭和十七年六月三十日（消印　下谷／17・6・30／后4—8）／東京市下谷区上野桜木町十七より／京橋区木挽町五ノ四　豊国ビル　文藝公論社気附／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

『準備時代』は、最後に（長篇小説『善き鬼悪き鬼』と入れるのを忘れましたので、あの作の『青春期』と云ふのを去年やはり「改造」に出しましたのであれは三回目です。お説どほり六七百枚の長篇の一部です。芥川の死より後まで書くつもりですから、あれだけ評されては少し不平です。しかし、それはどうでもいいので「芥川龍之介研究」の出るのがあまり遅いのはどういふのでせう。

六月三十日

二十三　昭和十七年七月六日（消印　下谷／17・7・6／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

貴文芸時評のこと決して気になどしてをりません。さて、いつかの集まりも、出る人々が可なり多く遠方に行かれましたが、あれを、これまでのやうに、僕中心の会などでなく、大正文学研究会のやうにむつかしくなく、数人で文学談を交はすといふやうな会にして、又やったらどうでせうか。さうして、顔ぶれも、少なくても、今までの方でなくても、文学談ズキの人が適宜によりあふ、といふやうな、つまり、文学シンポク会です。何とかお考へ下さいませんか。

七月五日

二十四　昭和十七年七月十七日（消印　下谷／17・7・17／后0—4）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

五日ほど上高地に行ってをりました。会に来られる方は諸兄にお任せいたします。又、会場もお任せいたします。

二十四日は河童忌で、もう芥川賞のヨセン（十八日）や委員会などありますから、日も仰せのとほりで結構です。

河出からまだ芥川の本きません。あの印税のわりあてですか。

七月十七日

二十五　昭和十七年七月十九日（消印　下谷／17・7・19／□）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

森川町郵便局出のおハガキ拝見―。実は、昨日は芥川賞のヨセン会、二十四日の芥川（河童）忌の日に大体芥川賞の詮衡会を終ると思ひます。それで、僕の方も二十七日以後がよいのですが、二十八、九、三十のうちで、やはり一泊のダンタイ旅行がありますので、如何でせう、七月三十一日以後で、出る方々の御都合のよい日をお選び下さいましたら。それから、今度の会は、シンキマキナホシのやうなものにして、今後のことを相談する事も一つの目的にしては如何でせう。つまり、前の会は僕中心で始まったのですから、今度は面目一新といふことを望むのです。今日は日曜でソクタツがききませんので、普通で出します。

七月十九日

二十六　昭和十七年七月二十八日（消印　下谷／17・7・28／前8―12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

昨日菊池君にあひましたら河出の「芥川龍之介の研究」の礼をとどけて来たが、僕のところに何も来ない、と云ってゐましたが、河出につがうあらうから、あなたから厳重お話し下さいませんか。

二十七　昭和十七年八月四日（消印　下谷／17・8・4／后4―8）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

昨日は何とも申しわけありません。申しわけは、出る前に人が来まして、六時頃に洋服をきるために、シヤツをきました頃から、大キラヒなカミナリが鳴りはじめましたので、申しわけないと、思ひながら、蚊帳の中にはひり、フトンをかぶり、九時半頃まで、耳をおさへて、大汗をかきました。今度から会場を八重洲園は如何でせう。便利で、あまり高くなく、ちよつとした物が飲み食ひできるやうですから、

。ヒサシブリの会デスから、実にザンネンニオモヒマシタ。オツイデニ昨日オデニナツタ人ノオナヲオシラセ下サイマセンカ。

八月四日

二十八　昭和十七年八月二十六日（消印　下谷／17・8・26）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

文芸時評ハイドクいたしました。

富山の薬売りの事は、今年の四、[*注1]五、六月号に三回つづきで、「早稲田文学」に野田好吾[*注2]君が書いてゐます。ちよつと面白いものです。

九月上旬（五日以前）に日曜会を開いて下さいませんか。今度は八重洲園はどうでせう。

八月二十六日

＊注1　五、六、七月号の書き間違い

＊注2　野村尚吾の書き間違い

二十九　昭和十七年八月二十九日（消印　下谷／17・8・30／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

いろいろ御配慮ありがたう存じます。今度お伺ひします時、野村君の小説の出てゐる「早稲田文学」持参いたします。古木君や上林君にも案内状をお出し下さいませんか。お目にかかりました時バンオク。

八月二十九日

三十　昭和十七年九月四日（消印　下谷／17・9・4／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

昨夜は、またまた話が片よりましたが、久しぶりで、なれませんので、あのやうなことになりましたが、この次ぎからはますます楽しい会になるか、と楽しんでをります。さて、あなたのお計らひで、高松棟一郎君と親しい方、せいぜい、四五人で、一夕高松君をかこみ、夕食会しながら、あちらの話を聞く会といふのを、お考へ下さいませんか。このことは高松君にも書いて出しました。

九月四日

。昨夜思はず高鳥君と自宅で話しこみ、野村君の小説の出てゐる「早稲田文学」を持参するのを忘れました。今度は必ず持参いたします。

三十一　昭和十七年九月五日（消印　下谷／17・9・5）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

葉書で失礼いたします。くはしく申しますと、十一日の午前二時頃から、キタナイ話ですが、上と下からわるい物を出しまして、十二日いちにち絶食したのです。これは、夕食（十日の夕食）にたべたものがあたつたといふより、暑さにあてられて丈夫な筈の胃が弱ってゐたからです。しかし、一昨日（十三日）はおかゆでくらし、昨日から、普通の食事をしてをります。

ただ、高松君にあへなかつたのが今でもザンネンに思つてをります。それから『芥川龍之介研究』は大体面白くよみました。「早稲田文学」別便でお送りいたしました。

三十二　昭和十七年九月九日（消印　下谷／17・9・9／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

もちろん出席いたします。但し、ノリモノ不便で、三十分ぐらゐおくれるかもしれません。

「早稲田文学」のあのあとの分の出てゐるのは、その時、持参いたします。

九月九日

三十三　昭和十七年十月十日（消印　下谷／17・10・10／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

突然ですが、日曜会、今度は、十五日から二十日までの間ぐらゐに、お願ひ出来ませんでせうか。

いつかの「早稲田文学」はお返し下さらなくても結構です。

十月十日

三十四　昭和十七年十月十七日（消印　下谷／17・10・17／不明）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（封書）便箋二枚　五銭

拝復、僕は、この間申し上げましたやうに、土曜、日曜にする方が多くの方に便利であると思ひましたので、土曜、日曜にサンセイします。それで、あの翌々日、石光君がお見えになりましたので、その話をいたしますと、それなら喜んで行く、と云はれました。それで、土曜、日曜、と申しますと、二十四、二十五日ですから、その事を今から川崎君につたへておきませんと、カンジンの宿に迷ふことになりますので、この手紙と一しよに、二十四、二十五、のことを、予定（八分どほりタシカ）として、川崎君に手紙を出します。

猶、昨夜、ちよつとなめてました。京成に乗るために上野駅の構内を通りましたら、溢れるやうな満員の有様におどろきました。それで、二十四日も汽車が出る時間より一時ぐらゐ早く駅に行つてゐないと、列を阻まされます関係で、うまく乗れないと思ひます。それで、十時四十分の沼津行き、十時四十五分の下関行き、十一時三十分の沼津行き、十二時五分の米原行き、十三時（午後一時）五分の大垣行き、十三時（午後一時）四十分の小田原行き、十四時十分の伊東行き（土、日のリンジ）、十四時十五分の姫路行き、などありますが、土曜日といふだけに、これらの汽車はまづ満員以上と思

ひますが、その覚悟をしないと、オジヤンになります。オジヤンはいやですから、二時間半の辛抱をすることにして、決行していただきたいと望みます。

それから、小田急といふ手も考へられますが、カンジのわるいのを辛抱すれば、三十分毎に出るのですから、この方ならいくらか安心ではないでせうか。

結局、二十四、二十五、日としまして、川崎君にかういふ話が大抵キマルから、環翠樓の瀬戸君に電話をかけて、宿料のことなど聞いてくださるよう、たのむ手紙を書きました。

それをこれと一しよに出します。

十月十七日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

三十五　昭和十七年十月十九日（消印　下谷／17・10・19／前8—12／杉並／17・10・19／后4—8）／下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛

（官製ハガキ）速達　十四銭

川崎君から「塔の沢はヨヤクはどうしても都合がつかぬ、といふので、底倉の仙石屋で、酒別で、七円（税とも）といふ交渉をした、宿はよくないが、川崎君（魚屋）の長年の得意で、湯が自慢で…」といふ返事が来ました。

それで、当日は駅までお迎へに出るから、雨天でも来られるか、大体の時間を、—知らせてくれ、といつてきましたので、センエツですが、暴風雨でない限り、行く、といふ返事を出しました。それで、日曜会に出る通知（出発の時間）を川崎君にもお出し下さいませんか。

小田原市幸四ノ五八五　川崎長太郎

三十六　昭和十七年十月十九日（消印　下谷／17・10・19／前8—12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（封書）便箋二枚　五銭

さきの速達のハガキは少しいそぎ過ぎましたので、改めて書きますが、あなたのお手紙の御意見と川崎君の御報告とを合はせますと、かういふ事になります。

◎十月二十四日十三時五分東京駅を出る汽車に乗る（大暴雨（ママ）でない限り決行）

◎宿屋は底倉温泉の仙石屋（一しよに来られない方は、底倉の仙石屋に行つて、小田原の川崎（あるひは大久保）から話があつた、と云はれたらすぐわかります。

川崎君からの手紙（ソクタツ）には、「塔の沢の環翠樓は瀬戸君の

話に、ヨヤクはどうしても都合がわるい、といふので、底倉の仙石屋に話して、七円（税とも）但し、酒別、といふことにした。仙石屋は格はよくないが、湯が自慢で、川崎君（魚屋）の長い得意先きであるから、気楽で、無理がきく。それから、小田原の元家老の子（大久保）が川崎君の親友で、今度の事で万事川崎君の相談相手となって、一行が来れば、昼飯のこと、見物のこと、雨の日は雨の日のこと、その他――といろいろ用意をしておいてくれたこと、」などが書いてありました。さうして、汽車の時間がきまれば、それを知らして下さいましたら、駅まで迎へに出る、と附け足してありました。

それで、もう高鳥君から、お聞き下さいましたか、と思ひますが、有志の方々に出す案内状を川崎君にお送り下さいますか。川崎君に「十月二十四日東京駅十三時五分に立つ、よろしく」といふ事だけでも、お知らせ下さいませんか。いろいろお世話になりまして、恐縮です。

小田原市幸四ノ五八五　川崎長太郎

十月十九日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

◎大体何人ぐらゐ行くか、といふ大体のところも、川崎君に、大体と断って、お知らせ下さいませんか。

三十七　昭和十七年十月二十一日（消印　下谷／17・10・21／前8―12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／東京市杉並区成宗一ノ九五／日曜会幹事　渋川驍宛　往復ハガキ（返信）　二銭

僕は十二時に駅に行きます。二等待合室に行きます。但し、勿論、汽車は三等ですが。

三十八　昭和十七年十一月十一日（消印　下谷／17・11・11／前8―12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

先だっては失礼いたしました。二十日すぎに日曜会はいかがでせうか。

どうも日曜会が遠のくと寂しい気がいたします。いつもお世話をかけますが、お願ひいたします。

三十九　昭和十七年十一月二十五日（消印　下谷／17・11・25／前8―12）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二銭

いろいろ御配慮ありがたう存じます。明後日（二十七日）に高鳥、倉橋両君にお目にかかりますから、その節いろいろ両君から伺ひま

す。

高鳥君にも書きましたが、僕も日曜会がしだいに楽しみになりましたから、お忙しい中、恐縮ですが、今後もよろしくお願ひいたします。

十一月二十五日

四十　昭和十八年二月十七日（消印　下谷／18・2・17／后0—4）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛　（封書）便箋一枚　五銭

拝復—倉橋君その他が来られまして、いろいろ相談の結果、「文庫」といふ雑誌も出してをり、紙も持ってゐるらしい、といふので三笠書房と、（勝手ながら）きめて、交渉してもらひ、僕も三笠書房とかけあふことにいたしました。

さうして、十九日に、委員の中野、田畑、倉橋の三君が会見して、いろいろ極める、といふ話です。

一泊旅行は、ゆっくり話しができ、くつろぎますので、僕は、いかなる義理ある原稿をも、その時だけ、うっちゃって、出かけるつもりです。

二月十七日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

四十一　昭和十八年六月二十九日（消印　下谷／18・6・29）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛　（官製ハガキ）二銭

前略　御多忙のことと重々お察しいたしますが、例の日曜会の本その他のこと、（田畑君が御親類の御不幸その他で来月初めから旅行されますので）、倉橋君にお手伝ひして上げて下さいませんでせうか。これは田畑君からもたのまれたのでございます。

なほ、大正文学研究会のこと、あの晩、河上君に話しましたら、快諾されました。

六月十九日

四十二　昭和十八年八月二十六日（消印　東京／18・8・26）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛　（封書）便箋五枚　七銭

渋川驍様　　八月二十六日　宇野　浩二

久しぶりのおたより嬉しく懐かしく拝見いたしました。『志賀直哉研究』お送り下さいましたとのこと、まだつきませんが、お礼申し上げます。

志賀直哉の文学は僕は一般の人がいふほど買ひませんが、この六七月は暑さしのぎにいろいろな本をよみ返しましたが、これはある

ところに書きましたけれど、僕には、日本のさまざまの古来の古典よりも、いふまでもなく西洋のすぐれた小説よりも、明治大正の小説が一ばん（身近なせるもありませうが）面白く思はれました。もつとも、この事は前々からも感じてゐたことですが。

さて、青柳君は、僕も、小学館の作家論叢書のことその他でこの二三年しばしばお目にかかりましたので、急になくなられたので驚きました。しかし、過労（は少し注意すれば何とかなりますが、）と栄養不良（この方はちよつと何ともなりませんが）とのために胃潰瘍になられた、といふのはどういふものでせうか、それ以上におお酒（この頃は不自由かと思ひますが）のせるではないでせうか。—思はずリクツを述べましたが……。

さて、僕が志賀の作品に不満を感じますのは、簡単に申しますと、冷た過ぎること、他人には極端に厳し過ぎて、作者と思はれる自分といふ人物に甘いこと、その主人公が、あらゆるものに対して、父にも妻にも、（時には、自分を中心として甘いことがありますが、）友人にも、あまりにわがまま過ぎること、わるい意味で世間知らずで、反省があるやうで反省がなく、ひとり合点なこと、その他であります。

空襲といふことは、あるかもしれませんし、あるに違ひないかもしれませんが、『空襲必至』などといふ云ひ方を僕は好みません。上の人が下の人の心を、積極的にしないで、消極的にするやうに思はれるのがどうかと思ふのです。もつと常識的に、来た時の用意を十二分にさせて（して）おいて、不断はもつと落ちつかせてほしい、と思ひます。さうして、産業□大に需要をさせ過ぎる（与へ過ぎる）のをもう少しすくなくして、文学者（あるひは文化人）にも、たとへば文学者には大正文学研究会ぐらゐは許すべきである、と考へてをります。

近頃はどこにもかしこにも、「疲れた」といふ声がきこえるやうですが、これは肉体的（もありませうが）より精神的なところがないでせうか。

一度、せめて四五人の方々とでもお目にかかつて、文学を語り合ひたい、と望みます。

先月の末（いや、五月の末）に拙著『人間同志』を小山書店からお送りさせましたが。

とりとめのないことを思はず長々と書きましたが、本当に、来月にでもなつて、涼しくなりましたら、日曜会とか何とかいふのでなくても、同好の者が文学を話し合ふ集まり（といふほど大ゲサでなく）といふやうなものが出来ましたら、僕も骨を折らせてもらひま

すから、お考へおき下さいませんか。

今の時にノンキなやうな事を述べましたついでに自分のことを申し上げますと、もう三ケ月以上も一つの小説を作るのに頭をなやましてをりますが、まだ悩ましつづけてをります。わたくし事を述べたついでに申しますと、「八雲」の第三編に書きました『島崎藤村』は去年の秋から今年の二月まで殆ど半年かかりました。元来の遅筆がますます遅筆になるやうです。又トリトメのないことを書きました。御判読下さいますと喜びです。

四十三　昭和十九年二月二十日（消印不明）／東京市下谷区上野桜木町十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛

封書（原稿用紙一枚）五銭

前略

いつも御本ありがたう存じます。

さて、いつかの会で御相談しようと、（前から石光君とも手紙で打ち合はしてあつたのですが、あの時はあんな有様で、）思ひながら、出来ませんでしたが、このはげしい時局の折りからですが、もう少しあたたかくなりましたら、四五人か三四人でも、また一泊の旅をしたいと思ふのですが、中山義秀君を一人いれますと、お酒の方もいくらか出る所もあるか、と思ひますし、適当な所も義秀君が知つてゐるやうですから、その事を今度の会で、御相談したいと存じます。

なほ、今度の御本は、今までいただきました小説と違つて、随筆集ですので、未読のものが沢山ありますので、一そうありがたく存じました。

近刊（といつて去年のものですが）の本を、本屋から、あると思ひますから、取りよせて、おおくりいたします。おひまにどうぞ。

二月二十日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

四十四　昭和二十年八月二十三日（消印　松本他は不明）／長野県東筑摩郡島立村蛇原　岩間松雄様方より／東京都本郷区　帝国大学図書館　山崎様気附／渋川驍宛

（官製ハガキ）三銭

御無沙汰してをります。ずゐぶん思案いたしましたが、結局、仕事とからだのために、先月上旬こちらに参りました。

「日本文学者」をこちらにお送り下さいますようお願ひいたします。おかげで、おちついて仕事をしてをります。お大事に。よいお仕事をなさいますよう、ここは松本の市外です。

八月二十三日

四十五　昭和二十一年五月八日（手渡し）　／松本市今町四三三より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛　便箋一枚

ご丁寧なおくやみ状をいただきながら、これはあまりの看病の痛みと、そのためにいくつかの原稿がおくれおくれになつてをりますので、お礼状もさし上げず、失礼してをります。

さて、突然ですが、こんど松本から『信濃雑記』といふ雑誌が出まして、創刊号には、武者小路、石井政之、上林暁、徳永直、中野重治氏にかいていただきましたが、二号にあなたの御随筆五枚でも十枚でも結構ですから、と雑誌社の方からたのまれましたので、よろしくお願ひいたします。

去年の十一月頃から毎月一度上京いたしますが、そのうち、いつかの会のやうなものをおひらき下さいまして、みなさんとお逢ひして久しぶりに文学談に花を咲かせたいと思ひますがよろしくお願ひいたします。

使ひの方が待つてをられます。乱文御ハンドク下さいますこと、こひ願ひます。

六月八日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

四十六　昭和二十一年六月二十五日（消印　不明）／松本市今町四三三より／東京都杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛　封書（原稿用紙「国民図書刊行会」20×10　五枚）

玉稿ありがたう存じます。

こちらも数日前からくもりがちの日が多く、今日も雨もよひの空で、昨夜はすこし見えてをりました飛騨山脈の山々も今は雲にかくれてをります。

わたくしごとですが、今日は亡妻の百ケ日ですが、さいはひ炊事その他をしてくれるものが来てくれてをりますので、読み書きは心ゆくばかりに出来ますが、持ち前の遅筆で、二三ヶ月も（一と月ごとに）延ばしてもらつてをります「人間」の小説も、十日以上かかりまして、五六枚しか出来ず、今さきもう一と月のばしてもらふ電報をうつたばかりです。

それはそれとしまして、とほい先きですが、秋冷の候にでもなりましたら、むかしの会の方々と御相談下さいまして、何月何日何時と日をおきめ下さいまして、その一週間ほど前にご通知下さいましたら、かならず上京したいと存じます。会場は、戦争中とちがひ、今はかへつて、さがせば、どこかにあると存じます。

すこし高いですが、築地の芳蘭亭などでしたら、僕からいへば、会場はとつてくれますし、ある程度の御馳走は出してくれます。や

つと、集会の自由が嫌なところから許されたのですから、それを利用して、昭和大正文学や西洋の文学について、心ゆくばかりお話しを、みなさんと、かはしたい、と存じます。

その時は、小田原の川崎長太郎君もかならず出てくると思ひますし、中山君石川君などの元気（酒の上の）な人々も出られると存じます。

十日すぎに十中の七八まで上京いたしますが…　今日は上田駅に、正宗先生、佐藤、里見君などと落ちあひまして、四人で別所へ行き、そこで文学談をかはすこととなつてをります。上田の近くに、里見君が（『姥捨』に書かれたところに）来てをられますので、里見君が上田駅に待つて居て、そこへ、軽井沢から正宗先生の話から佐藤君、松本から僕といふ風に汽車で出かけるわけです。

以上は五日の午前にかきました。これからは七日の午後にかきます。

一昨日、ヨテイのごとく、上田に行きましたら、里見君が夕方の中を迎ひに来てくれてゐましたが、正宗兄は都合わるく来られませんでしたけど、佐藤春夫君が、一と足さきに別所で待つてゐると聞きましたので、別所へ里見君と二人で行きまして、その夜は文学談で夜中の二時まで語りました。　昨日（六日）の夕方七時半に帰りましたが、今日は又、仕事をつづけてをります。

時候のかはり目、御健康と御健筆をいのります。

六月七日　　宇野　浩二

渋　川　驍　詞兄

上林君のあの夫人が永眠された由重々何とも言葉がありません。

四十七　電報　昭和二十二年五月十七日（消印　□□／22・5・17）／ナリムネ一ノ九五／シブカワギョウ宛

二〇二一

二〇　カンダ　一九　コ〇・一五

二ジ　ショボ　マエテング　ヘンコス」ウノ

コ〇・三八

四十八　昭和二十二年十月十四日（消印　本郷／22・10・14）／文京区森川町八六　双葉旅館（小石川三四三七）内より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）

五十銭

そのごはごぶさたしてゐます。先月三日に上京しましたが、時候のかはり目とれいの下宿の食料のためのエイヤウフリョウと、ウン

ドウブソクと、＝なにやかやで、仕事らしい仕事をせずにくらしてしまひました。。十五日は母のシヤウツキメイニチでルスいたします。

さて、いつかのやうな会はできませんが、（家がなかなかみつかりませんので、）白十字に「喫茶会（集会）ヒキウケル」いふやうな札がいつも出てゐます。つまり、はなしをすれば、あの二階をかしてくれるのではないか、とおもひます。それで、パンでも持ちよつて、あそこで、コオヒイをかわし、といふのはどうでせう。新日君の出版キネン、高鳥君の退社キネンをかね、といふのはどうでせう。両方とも「イハフ（祝ふ）」イミです。古木さんのおところおしらせ下さいませんか。

四十九　昭和二十四年一月五日（消印　本郷／24・1・5）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）二円

謹賀新年

いつかは失礼いたしました。

十二月二十三日―二十六日＝富士見（上諏訪）に行つてきました。

去年の十月二十九日に、森谷君にあひましたら、来月（つまり、今月）は「いつもあいてをります」といひました。ぼく、十七八九日のほかは、いつでもけつかうですから、また、あの会をおせわ下さいませんか。

五十　昭和二十四年一月二十三日（消印　本郷／24・1・23／杉並／24・1・14／東京都）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）速達　十七円

せんだつては失礼いたしました。

また、またといふことになりますが、「展望」の小説がはかどりませんので、二十二日までにしてもらひました。

それで、会の日をもう一週間おのばして下さいませんか。（失礼ですが、ことわりの郵便代ははらはせていただきます。）

五十一　昭和二十四年一月三十一日（消印　本郷／24・1・31／24・2・1）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）速達　十七円

また、また、です。

まだ「展望」の小説ができませんので、もう一週間おのばしくださいませんか。

一月三十一日

五十二　電報　昭和二十四年三月十四日（消印　杉並／24・3・14）／ナリムネ一ノ九五／シブカワギヨウ宛

二〇一一

一〇　ホンゴ　ウ　五四　セ一〇・二二

一シユカンノバ　セウ

セ一〇・四五

五十三　昭和二十四年十月二十二日（消印　東京都／24・10・22／杉並／24・10・23）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（官製ハガキ）

速達　二十二円

まだあの会の通知まゐりませんが、あの日（二十五日）上野の美術館の展覧会をちつと見てゆきたいとおもひますので、十二時ちやうどぐらゐに家を出たいとおもひます。招待券二枚あります。小石川五八四九

五十四　電報　昭和二十四年十月二十四日（消印　杉並／24・10・24）／ナリムネ一ノ九五／シブカワギヨウ宛

一五七

九　ホンゴ　ウ　一〇二　セ一一・〇

アス一一ジ　ニ」ウ

五十五　電報　昭和二十四年十月二十四日（消印　杉並／24・10・24）／ナリムネ一ノ九三（ママ）／シブカワギヨウ宛

二〇〇七

一〇　ホンゴ　ウ　二四　セ九・二五

二五ヒ一ジ　マツ」ウ

セ九・三三・ス

五十六　昭和二十九年五月二十四日（消印　本郷／29・5・24／后0—6）／文京区森川町七十七より／東京都杉並区成宗一丁目九五　渋川驍様方／倉橋彌一君追悼会世話人宛　往復ハガキ返信　五円

欠席

あのやうに申しましたが、あの時おはなししました、小説材料しらべの大和ゆきが、案内してくれる人の都合で急に早くなり、明日（二十五日）に出発しなければならぬことになりましたので、残念

ながら欠席いたします。せつかく自分のお別れ早くしてもらひながら、こんなことになりまして、何ともおわびの申しやうがございません。

五月二十四日

渋　川　驍　様

五十七　昭和三十年一月四日（消印　本郷／30・1・4／あと不明）／文京区森川町七十七より／東京都杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（封書）20×10〔築摩書房・原稿用紙三枚〕十円

拝復

謹賀新年

一日においでくださいました時は、ジンマシンだけでなく、軽い神経痛（右の肩）で寝てをりまして、失礼致しました。

さて、日曜会のことですが、数年前に、（あなたがお見えにならなかつた時のやうな気がしますが、お出になつてゐましたら、御免ください。）新宿のたしか中村屋で催されました時、田辺さんがお酒を持つてこられて、飲み手の川崎さんと保高君が飲みすごされ、その時、何かの話のついでに、川崎さんが保高君に、「これといつた仕事をしてゐない」といふ意味のことを云はれましたので、顔色が青くなつてゐた保高君が川崎君のそばにつかつかと歩いて行つて、あのふとい腕で、川崎さんをひどくなぐられたことがありました。その時、川崎さんは少しもテイカウされませんでしたから、喧嘩にはなりませんでしたが、ひどく気まづい空気になりました。

つまり、これからはそんなことがおこらないやうに、ずつと前のやうに、たのしく文学の話を主にするやうな会にすることにして、人の数もあまり多くないやうにして、集まりさうな人に集まつてもらふといふやうなやり方にしたらどうでせうか。

それで、こんどお目にかかりまして、いろいろ御意見をうかがひ、僕の考へもおつたへしたいと思ひますから、こんどおいでくださいます時、前の日に、御面倒ですが、電話をおかけくださいませんか。小石川（92）五八四九です。

一月四日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

五十八　昭和三十一年四月二十三日（消印　本郷／31・4・23／后0—12）／東京都文京区森川町七十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（封書）便箋一枚　十円

せんだつては御丁寧なお手紙（とわざわざ現金為替）をいただきまして文字どほり恐縮いたしました。

あの翌日から、あの晩に保高君からたのまれました原稿にとりかかり、五日かかつて十枚かき、それを保高君に送つたのが二十日でした。

二十一日には後楽園に野球を見にゆきました。それに、原稿を書きをはる前の日に、（前から話があつたのですが、）東京新聞の記者と野口冨士男さんが見えまして、文学の話をさせられて、へとへとになりました。

自分のことばかり書きましたが、あの時の会は、あなたのお骨をりのおかげで、大へん愉快でした。厚く御礼申し上げます。

四月二十三日　　宇野　浩二

渋川　驍　様

指のはれたのがまだ直りません。その上、左手に注意しすぎたのか、左の手の甲まではれて、両方の手にホウタイをしてゐます。

財布のこと、僕も、ほつとしました。

御面倒ですが、高鳥さんの新番地おをしへ下さいませんか。

五十九　昭和三十二年十二月八日（消印　本郷／32・12・8／前8—12）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一丁目九五／渋川驍宛（官製ハガキ）五円

大へん失礼いたしました。

今年は三月中頃から八月中頃まで、年末に出す評論集に入れる原稿のたきたし（タダ原稿）のために五ヶ月つぶし、その骨休めと義理のために、十一月の初めに京阪の方に行き、今月二日から五日まで甲府と松本にゆき、今晩（八日の晩）から九州に出かけ、十六日頃に帰ります。それで、あの会二十日すぎにもし出来ましたらいかがでせうか。失礼ですが、十七八九日か二十日頃一度お電話をおかけくださいませんか。但し十八日は留守にいたします。

六十　昭和三十二年十二月二十九日（消印　本郷／32・12・29／後6—12）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一ノ九五　渋川驍様方　／日曜会幹事宛　往復ハガキ返信　五円

いろいろおせわになりまして恐縮です。

八日にはかならず出席しますが、八日の午後二時から東宝で川端君の『女であること』の試写会がありますので、その方に行きたいと思つてをりますが、もし行つても五時までには帰つてくるつもりですけれど、フンパツしてタクシに乗つても五時を過ぎるかもしれません。それで、こんどは拙宅から会場までタクシで行くことにしま

して、勝手ですが、五時十五分頃に御足労くださいませんか。

この頃は本郷三丁目から地下鉄で有楽町まで十分ぐらゐで行けるので大助かりです。

六十一　昭和三十三年三月二十七日（消印　33・3・27／後0—6）／文京区森川町七十七より／東京都杉並区成宗一丁目九五／渋川驍宛（封書）便箋一枚　十円

前略

その後は大へん御無沙汰してゐます。お変りないことと存じます。

さて、せんだつてはわざわざおみまひくださいました上、好物をいただきありがたうございました。

実は、病気をしましたのを機会に静養しましたので、できるかできないかわかりませんが、四月一ぱいか五月初めまで久しぶりで腰をすゑて仕事をしようと思ひ、ぼつぼつ仕事にかかつてをります。

いづれ、そのうちに……

それから、同封しましたものは、実はこれまでも民藝からかういふものをよくおくつてもらひながら、土地の不便などで僕は一度も使つたことはありませんが、これも行けさうにありませんので、失礼ですが、御都合でお使ひ下さいませんか。

三月二十七日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

六十二　昭和三十三年四月二十八日（消印　本郷／33・4・28／後0—6）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一丁目九九／渋川驍宛（封書）便箋一枚　速達三十五円

前略

御無沙汰してをります。お変りないことと存じます。同封のもの、—こんどのは明治のしかも珍しいものと思ひます—僕も見たいと思ふものですが、来月一ぱいぐらゐ今かかりかけてゐる仕事にかかりさうですから、又、あなたにおおくりいたします。

四月二十八日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

六十三　昭和三十三年五月十八日（消印　本郷／33・5・18／前8—12）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（封書）便箋一枚　速達三十五円

前略

もう少し早くお送りしようと思つてゐましたのが、なかなか進行

しない仕事のために、ついおくれましたが、同封*注1いたしましたのをもしお使ひくださるおひまがありましたら…

この間のお手紙の『琵琶法師』は、藤村が、若年の頃、例の同人雑誌「文学界」に古藤庵といふ号で出したもので、近松のものなどを読んで、それに影響されて書いたものださうで、（藤村は、『破戒』がドストイエフスキイの『罪と罰』から暗示を得たやうに、影響されながら、自分のものにするのが上手だったさうです。）藤村は、人にあの『琵琶法師』のことを云はれると、手を横にふって、「あれは、あれは、…」と云って、いやがったさうです。この話は白鳥さんに聞きました。

あなたがお出でになった時、正宗さんが見に行かれた筈です。

五月十八日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

試写御案内

映画：楡の木陰（ビスクビジョン）の欲望　監督　ソフィヤ・ローレン　原作　アンソニー・パーキンス　デルバート・マン　ユージーン・オニール

日時：5月19日（月）后一時三〇分開場

后二時　〇分開映

場所：中央区銀座7丁目　日本楽器内

山葉ホール

お願い：（御来状の節本状御持参下さい。一枚御一名）

東京都千代田区有楽町2の3（朝日新聞ビル）

パラマウント映画株式会社

電話（20）7726代表

*注1　右の試写会案内状つき

六十四　昭和三十三年七月三十一日（消印　本郷／33・7・31／前8―12／杉並／33・7・31／後0―6）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一丁目九十九／渋川驍宛（封書）便箋一枚　速達三十五円

暑中おみまひ申しあげます。

仕事がうまく進行せず、相変らず不愉快不満な芥川賞の選評でテコズってゐるうちに、おおくりするつもりのものがおくれましたので、あわてて、この手紙を書きました。同封のもの一週間ぐらゐ前におおくりするつもりでした。

どうぞ暑さのをりからおからだお大事に。

七月三十一日　　宇野　浩二

渋　川　驍　雅兄

今年は（今年になって一度も旅行できませんでしたので、

秋には、故障のないかぎり、かためて旅行したいと思ってゐます。その一つは九州へこんどは桜島、霧島、その他

六十五　昭和三十三年十月二十日（消印　本郷／□・10・20／前8—12）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一丁目九九／渋川驍宛（官製ハガキ）五円

前略、いつも会のことを御心配をくださいまして、文字どほり恐縮してをります。僕、今月の中頃からカゼにかかり珍しく高度の熱になやまされましたが、熱には強い方ですけれど、十日あまり無駄な日をおくりました。自分のことばかり先に書きましたが、せんだっては結構なものありがたう存じます。悪例など考へずにかきかけの仕事をつづけてゐます、が、どうもかぜをひいてから体の調子がよくないので、ちよいと閉口してゐます。今日も一度机の前にすわりましたが、今まで□□してゐます。

六十六　昭和三十三年十一月十八日（消印　本郷／33・11・18／前8—12）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一丁目九十九／渋川驍宛（封書）便箋一枚　速達三十五円

いつかは御丁寧なお手紙いただきましてありがたう存じます。

又また失礼ですが、同封のものおつかひください、よろしかったら。この芝居の訳者から送ってきたのです。この訳者の長沼君は三十年あまり前からの友人です。場所は赤坂見附の交叉点のところださうです。

十一月十七日　　宇野　浩二

渋　川　驍　様

二十日から一週間ほどまた九州の方へ行ってきます。

六十七　昭和三十四年十一月十九日（消印　本郷／34・11・19）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一ノ九五／渋川驍宛（封書）ＫＯＫＵＹＯ便箋一枚

前略

いつも御配慮ありがたく恐縮してをります。

持病になりましたザコツシンケイツウになやまされてゐますが、一年ちかくやってゐるものをほそぼそとつづけてをりますので。

十一月十九日　　宇野　浩二

渋　川　驍　雅兄

けさの新聞で豊田さんの御急逝にびっくりしました。告別式には、僕は無理ですけれど、代理の者をやるつもりでをります。

六十八　昭和三十四年十一月三十日（消印　本郷／34・11・30／後0―6）／文京区森川町七十七より／杉並区成宗一丁目九五／渋川驍宛（封書）便箋一枚　十円（東横ホールの松川事件（劇団「仲間」第13回公園の入場券付）

中味（芝居の内容）はいくらかおもしろいと思ひますので。

十一月三十日　　宇野　浩二

渋　川　驍　雅兄

（ますだ　ちかこ／本学助教授）